

## 仁井田陞 「中國の 社會とギルド」

内田 智雄

わたくしが始めて仁井田教授にお目にかゝつたのは、昭和十五年の初秋、北京においてであつて、それは、わたくしたちのたずさわつていた華北農村の慣行調査打合せのためであつた。その次にお目にかゝつたのは昭和十七年の夏で、それは北京東城のキリスト教青年會の會議室で、たしか周作人さんなども出席せられており、仁井田教授はその時、中國の社會における平衡の論理というようなことを話されたと記憶している。その次は、昭和十八年の夏で、當時わたくしたちの職場であつた華北綜合調査研究所、すなわちもとの燕京大學の研究室であつたが、このあとの二回は、いずれも北京のギルドの調査に來燕された時のことで、教授の宿は、すくなくとも昭和十七年のそれはドイツ飯店で、内地にあつては到底想像することもできない北京の猛暑とたゞかいながら、會館をたずね、碑文を寫し、ギ

ルドの役員たちを訪ねて、まさに東奔西走の生活であり、夜は夜でむし暑い旅舎の窓に資料の整理に没頭せられていたのであつて、當時北京の生活にもやゝなれて、晝間は涼を求めて太廟や中央公園に洋車を走らせ、夜ともなれば北海の池邊にビールを痛飲しつゝあつたわたくしは、教授の孜々として倦むことを知らない努力の生活を見て、かげながらひそかに、いまさらの如く學問のきびしさを思い知らされたものである。そうしたわけ、この書の成立については、廣島の今堀教授の如く、直接に密與するところがなかつたばかりか、この書の妊娠中に、教授の勞苦と陣痛のすがたを通して、いまさらの如く母たることの尊嚴さを知らされたのであつて、その意味では、この書を構成しつゝあつた北京における教授の調査研究の生活は、くさりきつていた當時のわたくしに、すくなからぬ影響をあたえたものといわなければならない。故にこゝに、ギルドについては全くの門外漢であるわたくしが、教授からのこの書の惠與を機會に、そこはかとなげ感想をつゞりあわせるのも、わたくしにとつては、單なる偶然ではないといふやうに思う。

まず教授は本書の「序」において、次のように自己の立場を明らかにしておられる。「むしろ、ねらいは中國的、いな、東洋的ギルド組織及びギルド意識の批判のための作業である。中國がその變革の前におかれてゐる眞實の地盤、そして東洋自らが越えねばならない眞實の地盤をえがくためのものであり、それ故に問題の由來と本質とを飽くまで克明に分析追求しようとするのである。それは中國のギルドの歴史的な位置づけを試みよう

うとするのであり、ギルドの歴史的評價のための基本作業である。そして教授の意圖されたこの「ギルドの歴史的な位置づけの試み」は、清代に關しては克明に探訪せられた各業會館の碑文・規約や、廣く涉獵せられた道教やギルド關係の典籍によつて、また清末民初から調査當時に到るまでは、豊富に蒐集せられた資料文獻や各ギルドの役員による應答などにより、さらに加うるに教授の透徹した史觀と、問題處理のあざやかな手法とによつて、殆んど完全に近い成功をおさめているわけである。一般に文獻學者のおちいり易い通弊は、文獻資料の過信とそれに基調する問題の早急な抽象化概念化の傾向であるが、教授があれだけ豊富な資料を蒐集せられておりながら、これを過信することなく、またそれのみ踰踏することなく、不斷ヨーロッパのギルドと比較對照を試みながら、社會の動きとともにこれを把握し理解しようと思はれたところに、この成功をかち得た最大の理由があると思う。そしてその意味では、かつての「唐宋法律文書の研究」とか、「支那身分法史」の著者としての教授とは、まさに別人なるかの感なきを得ないのは、ひとりわたくしのみではなからうと思つが、そのよつてきたるところをわたくしの管見をもつてすれば、直接にはおそらくは、華北農村の慣行調査に參與せられたことにあると思はれる。換言すれば、從來ひたすらに歩んでこられた文獻學者としての教授が、突如として生きて動き、そして變化していく慣行を研究對象とされるに到つて、教授の從來の立場と方法とは、コペルニカス的に轉回せざるを得なかつたと思はれる。とにかくその意味で

華北農村の慣行調査は、教授にとつても、また本書の如きを生み出さしめたという意味においてわが國の學界にとつても、すくなからぬ副産物をもつたということになるのであるが、しかしながらひそかにおもふに、この書物は別として——事實この書は既に數年前に稿成つていたわけであるが——教授の最近における學問的な傾向には、全的には信服しがたいものがないではない。即ち教授の近著「中國法制史」(岩波全書)の序説、「東洋的社會と規範意識」の項の如きがその一例であつて——そしてこれは教授の東洋法制史の基本的な立場であるわけであるが——これをわたくしをして端的にいわしむれば、まさに意識過剩の傾向があるのではなからうか。とはいへそれが學問的な研究であるかぎり、教授のいわれる如く、問題の歴史的な位置づけに異議があろうはずはなく、まして現在のように、わたくし自身が實態調査を基調として仕事をしているにおいては、この問題こそ教授とともに切實な問題であるわけであつて、それは要するに「現在の現實問題」を如何に解し、またそれに何程の歴史性を見出すかということにあるかと思つ。いまだし問題を具體的に提示すれば、わたくしといえど、現在わが國になお根強く殘存しているオーソドックスな中國の理解のみが、決して中國を、またその文獻資料を、正しく理解する方法でないことに些かの異見をもつものではないけれども、中共の革命工作に積極的に參與し、あるいはまたその訓練をうけつゝある現在の人民の意識をもつて、前近代社會の政治的權威に對する民衆の意識に投影させ、その政治思想を東洋的專制、即ちもつぱ

ら民衆を抑壓し搾取するものとしてののみ存する權威主義のあらわれとして解される教授の見解には、やはり意識の過剰のきらいがあるのではないかと思う。

そしてこのようにいうわたくしをもつて、教授は、わたくしの歴史認識のあまさを指摘し、政治のからくりを知らず、いまだ舊套を墨守するものであるとされるかも知れない。しかし問題は、まさに教授のいわれる「現在の現実問題」の認識如何にかゝつていのであるが、われわれの調査や歴史的研究の目的が、政治運動やその啓蒙宣傳に存しない以上、純正科學的に「現在の現実」を直視する必要がある、古代や中世をもつてそのまゝ近代を考へてはならないのと同様に、近代をもつてそのまゝ古代や中世を考へてはならないことはいうまでもない。換言すれば政治も民衆も、やはりその時代時代の社會に生きておるのであつて、古代や中世は現代を説明するためにのみ存するものではなく、また近代や現代をもつて、必ずしも古代や中世は説明し得ないのであり、ましてや近代におけるが如く、その變轉が特に甚だしいのにおよである。しかしながらわたくしもまた、教授のいわれる東洋的專制、即ちその權威主義的政治體制や政治理念の存在を認めることに決してやぶさかではないが、たゞ近代における民衆の自覺とともに、相對的に複雑化し尖鋭化してきた政治理念や政治體制を、そのまゝもつて古代以來の文獻に讀みとらうとするが如き印象をあたえる教授の論述には、わたくしはにわかには賛同することができないのである。

かるが故に教授の近著「中國法制史」の基本的立場とみなされるものには、わたくしに若干の異見なきにしもあらずであるが——この書については改めて妄評の機會をもちたいと思つて——この書、即ち「中國の社會とギルド」においては、幸にも、わたくしのいう教授の意識過剰は殆んど見當らないのであつて、それにはおそらく次のような事情が存すると思われ。即ち教授の權威主義論に見られるような學問的轉向、あるいはまた著しい躍進といふか、とにかく教授におけるこのような傾向は、極めて最近のことに屬すると考へられるが、それが教授の華北農村の慣行調査を契機とし、またそれに胚胎すると想像されることは既述の如くである。しかしそれは、當時——それは日本軍の壓政のもとに民衆は呻吟していた時ではあるが——名もない華北の農民たちの間に、權威に對し、壓政に對し、搾取と窮乏とに對して、不平怨嗟の聲や氣運が澎湃として横溢していたことによるものではなく、從來着實な文獻學者としての教授が、始めて實證的な、しかもそれは絶えず動き、變化していくものとしての慣行を、たまたま調査研究の對象とせられるに到つて、在來の文獻資料のみによつては味得ることのできなかつたあるものを、着實勤勉なる文獻學者なるが故にこそ、却つて明敏に感受し、基本的にその學問的立場を變改せられたものであると思う。そしていまひとつ看過し得ない他の要因は、この慣行調査に教授とともに共同研究の責をとられた東大法學部や、東亞研究所の人々の學問的影響であつて、それは同一の調査資料による共同研究であつたことが、切實な

ものとして教授に影響をあたえたものと思われる。しかしながらこのギルドの調査にあたられた當時の教授は、わたくしの見るところをもつてすれば、今日見られるような明確な立場はとつておられなかつたのであつて、従つて結果的には、「唐宋法律文書の研究」や「支那身分法史」のそれと、最近における教授の立場と、思想的にもまた時間的にも、まさにその中間的過渡的な立場にあるものといふことができるのである。他面現實の實態は、それが着實な調査であるかぎり、調査者の立場によつて、自由に擴張解釋がなされ得る、いゝものでは決してないし、また事實當時のギルドの實態も、いまだそのような段階にはたちあつていなかつたといわざるを得ないと思う。とにかく最近における教授の數多い勞作のうちで、わたくしがこの書をとくに高く評價する所以のものは實にこゝにあるのである。

とまれ教授はこの書において、文獻學者としての本領を遺憾なく發揚せられてゐるとともに、他方調査マンとして、そのエネルギーをシユな探求心を、問題を究極にまで突きとどめねばやまない實證的な方法に充されているのであつて、その意味では新舊内外を問わず、あらゆる中國ギルドに關する羣書のうちで、極めて卓絶した價値をもつものといふうらと思ふ。殊に北京各業會館やその碑の寫眞、また碑文や規約の類の豊富な紹介は、今日となつてはその資料的價値を一層増大したものとわななければならぬし、またわたくし自身にとつては、この書を通して、なつかしい北京への郷愁を、さまざま思出とともに久しぶりに味うことができたわけである。教授の文字通りの勞作を紹

介すべく筆をとつたわたくしは、まさにその本旨を逸脱して、あらぬ方向に筆を驅るの結果とはなつたけれども、この書の周到な紹介と批評とは、教授とともにギルドの調査にあたられた今堀教授によつて、夙に史學雜誌(第六一編 第二一號)になされてゐるが故に、いまはすべてをそれに譲ることとして、こゝには教授との平素の交誼に甘え。わたくしの素懷の一端を申し述べて、もつて高著の紹介にかえることゝしたい(岩波書店、定價金五百八拾圓)。